

## 誌上発表

## 66 中日疫病史の中の「疫」と「瘟」

邵 沛

中国と日本の疫病史上、各時代に疫病による大規模な人口死亡の記録がある。しかし死因になった疾病の種類に関しては明確でない。多くは「疫」と「瘟」で表している。故に「疫」と「瘟」というのは古代の伝染病および流行病の呼称である。「瘟」と「疫」とは、意味は近いが明らかに区別して使っている場合もある。両者の出現時期は異なる。現存する資料から見ると「疫」字の出現が「瘟」より早い。

## 一、「疫」

古代、疫とはもともと軍隊のなかで伝染病が発生しやすかったことから、軍人の服役の「役」に疔を加えた「疫」「瘵」という字が生まれ、これが後に「疫」となった

のである。「素問、刺法論」に「五疫之至、皆相染易、無問大小、病状相似」と云う。「周禮」に「率百隸而時儼、以索室馭疫」と説き、「説文」では疫字を「民皆病也」と解釈する。「疫」の字義はヒポクラテス全集の「Epidemie」、ドイツ語の「Volkskrankheiten」および英文の「epidemy」に符合する。中国では疫が病気の流行を表す言葉として使われるようになったのは紀元前四六〇—三七二年で、ヒポクラテスの「流行病」の提唱と同じ時代である。

日本に現存する最古の史籍『古事記』に「此天皇之御世、疫病多起、人民死為尽」とある。これは日本疫病史上「疫」についての最初の記事である。この後に出た『日本書紀』では役に疔が加わり変化し疫となったのである。中国と同じく疾疫、疫疾、疫病と様々に書いた。梶原性全の『頓医抄』に「疫病というのは、四時不正の気によって人病、靈祇邪鬼のたくび、たよりをえて、人をなやます、或いは、一郷一州一家こぞつてうつりやむ」と説き、「玉莖疫病」「玉門疫病」と称することもあると述べている。

## 二、「瘟」

「温」は『素問、六元正記大論』の中の「陽明司天、終之氣、其病温」に病名として初めて現れる。「瘟」の出現は「疫」より遅い。「説文解字」には「瘟」についての記載がない。東晋時期の葛洪の『抱朴子』に「是以断谷辟兵、厭劾鬼魅、經瘟疫則不畏、遇急難則隱形、此皆小事、而不可不知」と初めて関連する用法が現れる。明代の呉有性の『瘟疫論』に「傷寒論曰：発熱而渴、不惡寒者為温病。後人省<sub>レ</sub>加<sub>レ</sub>疔為瘟、即温也。要之、古無瘟、痢、症三字、蓋後人之自為變異耳。」故に医家達が疾病による発熱を「温」と称したことが「瘟」字が生まれることに影響を与えたといっている。

日本の『医心方』は、また葛氏方を引いて、「傷寒、時行、温疫、雖有三名、同一種耳、而源本小異」と云う。

以上のことから見ると「瘟」が最初に出現した時代には、医者は大部分の伝染病の症状の中で発熱をもつとも重視したことを示している。後の時代においても伝染病を時々「瘟」と称した。

## 三、「瘟」と「疫」

西漢時代の前の人達は大規模の伝染病を「疫」で表した。「瘟」と「疫」を併用するのは魏晋時代以後のことである。「温」は「瘟」より確かに発熱の症状を表す。明清時代に温病の範囲が明確に定められた。温という字には病理的な意義がある。しかし、温と瘟を混用することも時にある。「瘟」も「疫」も単独で使用することもある。例えば、大頭瘟、蝦蟆瘟、西瓜瘟、瘟黄などがある。「疫」の場合は疫疹、疫喉、疫病、また動物の伝染病を表す牛疫、牛瘟もある。飢疫、荒疫、旱疫など自然災害と疫病のつながりを表す言葉もある。

日本では江戸時代の初めに、時疫、瘟疫疫病を使っている。

以上のように病名の使い方から疾病の歴史環境、発生状態、病態の認識を推測することが出来る。そして、疫病学は人類文化の歴史と密着しているため両者は切り離すことが出来ない。本稿を記すにあたり、酒井シヅ教授にご指導いただいたことを深謝します。

(順天堂大学医史学研究室／深圳市中心医院)